

巻 頭 言

図書館と初期衝動

大学図書館長 難波 功士

私が「初期衝動」という言葉を意識したのは、2009年リリースの「ヒップホップの初期衝動」という曲を聴いたあたりからです。作詞は、作家業でも活躍のいとうせいこうさん。アメリカからヒップホップカルチャーが日本に伝わり始めた1980年代の、いとうさん自身の体験にもとづく歌詞でした。その頃から、人が何かの道に進んだ際に、その道に進むきっかけとなった人・モノ・コトを指して「初期衝動」という言い方が広まってきたように思います。

では、自分にとっての初期衝動は何かと振り返ってみると、いくつか候補は浮かんでくるのですが、最初の一撃として思い至ったのは、小学生の時に市立図書館で借りた『安政五年七月十一日』という本でした。江戸時代の金沢城下で、米価の高騰に苦しむ町民が城近くの山に集結し、声を揃えて「米くれまいやあ 頼むわいやあ 中納言さんひもじいわいやあ」などと叫び、殿様の耳に届けさせようとした事件をもとにした児童文学でした。作者のかつおきんや（勝尾金弥）さんは、当時、石川県で教師をしつつ、地元の歴史や民話を題材とした創作活動を続けられていた方です。

小学校時代の最もインパクトのある読書体験が『安政五年七月十一日』だったことが、いくぶんは影響したのか、大学での専攻は日本近世史となりました。しかし、早過ぎる初期衝動はやはり息切れするようで、大学卒業後はまったく別の道に転じることになるのですが、ともかく小学生の時の一冊によって、私の22歳までは方向づけられていたような気がします。

そんなことを思い返して懐かしくなり、最近、Amazonで『安政五年七月十一日』を検索し、手ごろな値付けの中古本を購入してみました。届いた本を開くと、そうそうこんな話だったと約50年前の記憶はよみがえってくるのですが、やや違和感も覚えます。その本の奥付をみると、それはかつおきんや作品集の中の一冊で、1976年に発行されたものでした。小学生の私が手にしたのは、1970年刊行の初版本だったと思われます。それとはどうやら装丁等が若干違っているようです（1970年のバージョンは、おいそれと手が出せない値段でした）。

半世紀過ぎても頭でも、体でも、ある本のことを覚えている。そんな強烈な体験を与えてくれたのが、私の場合は図書館でした。

今後とも図書館が、若い人たちの初期衝動の場となればと、図書館長の職に就くにあたり考えた次第です。



難波 功士（なんば こうじ）

関西学院大学社会学部教授（メディア・コミュニケーション学専攻）。博士（社会学）。専門は広告史、文化社会学など。1993年、東京大学大学院社会学研究科社会学専攻社会情報学専修修了。（株）博報堂勤務を経て、1996年関西学院大学社会学部に着任、現在に至る。2022年4月から関西学院大学図書館長。最近の著書・共著書に、『広告で社会学』（2018年、弘文堂）、丹羽典生編著『応援の人類学』（2020年、青弓社）、阪本博志編『大宅壮一文庫解体新書：雑誌図書館の全貌とその研究活用』（2021年、勉誠出版）などがある。